



## no respect of person とaccountability : プロジェクト「キリスト教主義教育研究」から

著者	大西 晴樹
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニューズレター
号	24
ページ	18-19
発行年	2001-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/295">http://hdl.handle.net/10723/295</a>

## no respect of person と accountability

—プロジェクト「キリスト教主義教育  
研究」から—

大西 晴樹

あと数年後に迫った全員入学の時期を目前にして、バブル崩壊後の少ない資源配分のもとで生き残りを賭けた「教学改革」に四苦八苦しているのが各大学の現状ではな

いだろうか。右肩上がりの経済成長と大学進学者の増大に支えられた「古きよき時代」は過ぎ去り、低成長と少子化による21世紀の「新しい競争時代」は確実に到来しつつある。さて、このような状況において本学の建学の精神であるキリスト教主義教育はどのようなものであるべきか。すなわち「基督（キリスト）教による人格教育を基礎に、広く教養を培うとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的応用能力を発揮させる事を目的とする」という学則第一条を、空文化せずどのように理解・発展させていったらよいか、これが本プロジェクトの課題である。このあまりにも巨大な課題について、10数年前に学長のクリスチャン・コードの廃止が提起されたさいに教員有志にミニコミ誌『真理を求めて』においていくつかの議論があったことは年配の方ならば記憶に新しいと思うが、その後多くの新しい構成員を迎えたにもかかわらず、コードについて決着を見てからはこの課題について議論が交わされてきたとは必ずしもいえない。そこで、問題提起の意味も込めて最近私が考えている事柄の一端を披瀝し、キリスト教主義教育プロジェクトの紹介に代えさせていただければ幸いである。

近代におけるキリスト教、なかんずくプロテスタンティズムの意義は、マックス・ヴェーバーによって「第一次的人権」とよばれた「良心の自由」の獲得にあったといえよう。この自由の論理の核心にあった言葉は、新訳聖書のガラテア書や使徒行伝にも出てくる「神は人を分け隔てせず」

(God is no respecter of person)であった。そもそもこの言葉は、ユダヤ教を絶対視していた原始キリスト教のエルサレム教団に対し、パウロが異邦人伝道を認知させるさいに用いた言葉であり、ユダヤ教の一派であったキリスト教を世界宗教へ飛躍さ

せる梃子の役割を果たした。近代プロテスタントの人権観念の形成においても、この言葉はその論理の核心に位置していた。すなわち、正当派カルヴァン主義が二重予定説のもとに少数の「神聖な者」の選びを正当化したのに対して、ゼクテは「無限の慈しみを持つ神は・・・人を分け隔てせず、万人に対して等しく慈しみ深く、等しく公平であられる」と述べ、正当派カルヴァン主義がもつ「僭越さ」やそれが大衆に与える「絶望」を容赦無く告発し、異端であろうともその「良心の自由」は保証されなければならないと唱えたのである。

こうして「神は人を分け隔てせず」という聖書の言葉は、「神の前における人間の本質」という問題を提起し、人間が現実の生活のなかで拘泥されて止まない容姿・学歴・富・権力・人種・国籍・性別などに囚われない「自由」、すなわち、「被造物神化の拒否」という視点を提供し、これは、キリスト教世界でもある西洋近代における人間解放の論理として機能し、皇国史観に心酔していた日本人をも解放した。ところで近年のヴェーバー研究においてこのようなプロテスタント近代をも相対化しようとする意欲的な試みがなされているが、人間解放の論理がもつ事象的性格に着目し、この論理がもつ官僚的合理主義の論理との類似性を指摘している。すなわちno respect of personを直訳すれば「人間を重んじない」「人間を顧みない」という意味になり、「倫理化を遂行する力」が弱まれば、自由を提供したこの論理は人間を事象的、あるいは無人間的に取り扱う論理に容易に転化するのである。世紀末に横行したカルト集団の狂気、少年凶悪犯罪や警察不祥事の頻発はそのような近代の崩壊を告げる出来事なのであろう。

では、ポスト近代の大学教育においてなにを目指すべきであろうか。私はaccount-

abilityの重要性を訴えたい。アカウントティングといえば通常、財産勘定である会計を想起するが、キリスト教のコンテキストにおいては、死後、審判のさいに神の前に立たされた個人が自分の行状を申し開きすることを意味する。唯一者のまえで自己を相対化する事のない人間には、アカウントティングはあまりも馴染まないのではないだろうか。日本人が自己の帰属する集団の内部でしか言葉を持ち得ないこと、外国の会計基準と比較した場合の不明瞭さ、これらはaccountability、すなわち、「原因とその結果について責任をもって説明する能力」の欠如に由来している。プロテスタント近代の遺産である「自由」の溶解現象のなかで、明治学院大学がキリスト教主義教育をいまなお大切にしているとしたら、全学共通科目はもとより専門科目においてaccountabilityの教育を目的とする事は意味のあることのように思われるが、どうであろうか。

(おおにし はるき 所員・経済学部教授)